

## 中世淡路島南部をめぐる海域世界と交通

大村拓生

### はじめに

「鳴門の渦潮」に関わる中世の文献史料については、以前の学術調査報告書のなかに、福家清司氏が文書・記録を、小島明子氏が文学作品を、それぞれを典拠とした論考が掲載されている<sup>(1)</sup>。ただその対象は鳴門海峡に限定されており、視点も鳴門（阿波）側からのものになっている。

それに対して本稿では、対象を淡路島南部の海域に広げ、離島である沼島（兵庫県南あわじ市沼島）を中心に、淡路・阿波・紀伊を含む海域世界<sup>(2)</sup>の様相を文学作品から抽出し、それを断片的な文書・記録とあわせて考察する。また海上交通の実像について、中世淡路の湊の特質を踏まえて検討する。そのためすでに福家・小島両氏の論考で触れられている史料についても、新たな視点から分析の対象とする（関係地図は章末に示した）。

### 1. 文学作品にみる海域世界

#### (1) 『土佐日記』にみえる海域世界

小島論文でも取りあげられているが、承平4年（934）12月に任国土佐を發ち、翌年2月に帰京した紀貫之の『土佐日記』は、当該期の海域世界の様相を具体的に伝えている<sup>(3)</sup>。貫之一行は正月21日に室津（高知県室戸市）を出航するが、そこからしばしば海賊の襲撃を恐れる記述がみられるようになる。29日に土佐泊（徳島県鳴門市）に到着し、次の30日は、以下のように記される。

卅日、雨風吹かず。「海賊は夜歩きせざなり」と聞きて、夜中ばかりに船を出だして、阿波の水門を渡る。夜中なれば、西東も見へず。男女、からく神仏を祈りて、この水門を渡りぬ。寅卯の刻ばかりに、沼島といふ所を過ぎて、多奈川といふ所を渡る。からく急ぎて、和泉の灘といふ所に到りぬ。

今日、海に波に似たるものなし。神仏の恵み蒙れるに似たり。今日、船に乗りし日より数ふれば、三十日あまり九日になりにけり。今は和泉の国に来ぬれば、海賊ものならず。

一行は海賊は夜に行動しないとして、夜中に出航して「阿波の水門」を航行し、夜明け前に沼島の北側を通過して、多奈川（大阪府泉南郡岬町谷川）に渡り、和泉の灘（岬町深日カ）に到着した。新月に近いためか海に波はなく、神仏の加護で安全に航行でき、和泉に到着したので海賊の恐れもなくなったという。

ここから土佐泊から淡路島南部を航行して、和泉に渡る航路が存在し、夜でも航行可能と認識される安定したものだったことがわかる。その一方で海賊に襲撃される恐れがあり、和泉国（大阪湾）に入るとそれが解消されている。承平4年には山陽南海両道10ヶ国18神に「海賊御祈」の臨時奉幣使が派遣されており<sup>(4)</sup>、承平6年からは藤原純友の活動が問題とされていく。それとの関係はさておき、室戸岬を越えて四国東岸に入る時点から叙述

されるようになることを踏まえると、そこから淡路島南岸に至る海域が、海賊の活動領域とみなされていたことになる。停泊していない沼島が叙述されているのも、海賊の根拠地との認識が存在していたためではないか。

時期は降るが、建長6年(1254)に成立した説話集『古今著聞集』12-430には、南海道に発向した筆策師用光が海賊に殺されそうになったが、彼の吹く音色に感涙して許され、「淡路の南浦」まで送り届けられたという物語が収められている。やや地域的なズレはあるが、海賊の盤踞する海域と、安全地帯としての陸域が対比的に描かれたものである。

## (2) 源平内乱期の海域世界

続いて源平内乱期の海域世界の様相を、軍記物語の叙述から検討する。

寿永2年(1183)7月、木曾義仲の入京で安徳天皇とともに都落ちした平家勢力は、態勢を建て直し福原(神戸市兵庫区)に拠点を構え、義仲を倒した源範頼・義経に対峙した。それに対して平家を裏切って源氏に通じようとする阿波・讃岐の勢力は、備前国下津井(岡山県倉敷市)にあった平教盛とその子の通盛・教経を襲撃するが敗れ逃れる。かれらは淡路国福良にあった源為義の孫である淡路冠者・掃部冠者を大将として抵抗するが、追ってきた教盛らがそれを倒し、教盛は福原にのぼった。淡路国の住人阿万六郎宗益も源氏に通じ都に上ろうとするが、教経がそれを小舟15艘150余人で追って西宮の沖で防ぎ、六郎は河尻(尼崎市)に入ることができず紀伊に逃れようとして和泉国ふけい田川(深日・多奈川)で討たれたという(『延慶本平家物語』第五本16「能登守四国者共討平事」)。

全体的状況については本報告書所収の福家論文に譲るとして、備前・讃岐・阿波から鳴門海峡を經由して淡路南部へとつながる海域世界の様相を示すものといえる。また淡路南部の阿万を名字とする武士が、淡路東岸をまわり西宮沖から和泉側に逃れたというのも、大阪湾の航路を考える上で興味深い。『平家物語』には全くみえないが、福原で大敗した平家が屋島に逃れる途中に福良に立ち寄り、平経盛が戦死した敦盛の首級を茶毘に付し煙がたなびいたのが、湾内の煙島の由来と伝承されているのも、これがもともになっているのかもしれない<sup>6)</sup>。福良が淡路から阿波への渡航地になっていたことは、高野山道範の讃岐流刑に関わる史料をもとに福家論文で触れられており、僧一遍も阿波(出航地は不明)から福良に渡っている(『一遍上人絵伝』巻11)。

それはさておき、屋島に逃れた平家のうち、惟盛は30艘ばかりの船で南海に向けて離脱したという<sup>6)</sup>。これについて『延慶本平家物語』第5末10「惟盛卿高野詣事」には、「阿波国伊吹浦より鳴戸の澳を漕渡り、白浦・吹上・和歌浦・玉津島の明神・日前国懸の社をは只其とのみ伏拝、紀伊国由良湊と云所へ付給ふ」とある。伊吹には「ゆき」と振り仮名がうたれているが、太平洋岸の由岐では鳴門との関係が理解できず、どこまで信用できるかという問題はあるが、讃岐から淡路南部を経て紀伊という海路が前提とされているとはいえるだろう。一方、屋島の平家追討のため、源義経が渡部(大阪市)から阿波国椿浦に渡り、そこに田辺から熊野別当湛増が駆けつけたとある<sup>7)</sup>。これも大阪湾から紀淡海峡を經由して阿波への航路が紀伊とつながる海域世界を示すものである。

## (3) 『太平記』の渦潮説話と沼島

このような淡路南部を中心とする海域世界の様相をもとにした物語が、『太平記』第18

巻 11「一宮御息所の事」にみえる。小島論文でも触れられているが、紹介しておく。

後醍醐天皇の一宮である尊良親王は、元弘元年（1331）8月の父の挙兵に呼応するが、逃亡先の河内で捕らえられ、土佐に配流される。史実ではそこから九州に逃れ、肥前国江串三郎入道に担がれて鎮西探題滅亡後に帰京するが<sup>(8)</sup>、物語では土佐の畑（幡多）から随身の秦武文を遣わして、努力の甲斐あって結ばれたにもかかわらず京に残した妻（御息所）を呼び寄せようとする。ところが風待ちのために滞在していた尼崎で、御息所的美貌を見初めた筑紫の松浦五郎が策略をめぐらして拉致し、大船に追いつくことができない武文は海底の龍神となってそれを止めるとして、切腹して海に沈む。

御息所を載せた船は順風に乗っていたが、「阿波の鳴渡」で風向きが変わり渦に巻き込まれ、武具を海に投じても効果なく、御息所の衣でも少し渦が静まっただけで、船は三日三晩立ち往生してしまう。それに対して梶取が、「この鳴渡と申すは、龍宮城の東門」に当たり、龍神の欲しがるものを海に沈めないとこのようなことが起こるとし、御息所を捧げ乗船する百余人を助けるよう要求する。それに従おうとした松浦を便船していた僧侶が止め観音の名号を唱え、海の中から馬に乗った秦武文が現れ、船を止めるよう要求する。梶取は武文の怨霊だとして、御息所と水手を小舟に乗せると、にわかには風が吹いて松浦の乗る船は行方知れずになり、その後には波が静かになったため、水手は船を淡路の六島（沼島）につけた。沼島は「釣りする海士の家」ばかりで、御息所の幡多へ連れて行ってくれとの願いも、「いづくの泊りにても、人の奪ひ取りまらぬ事の候ふべきか」と断られ、留まらざるを得なかった。

一方、土佐の尊良は音沙汰がないまま心配していると、「阿波の鳴渡を過ぎて当国へ渡りし船」の楫にかかった絹が、自身が贈ったものと知り悲嘆に暮れる。しかし幕府倒壊により都に戻った尊良のもとに、御息所が沼島で存命との情報もたらされ、呼び寄せることができた。それもつかの間、尊良は新田義貞に同行して越前金崎城で自害し、その首が御息所のもとに届けられたという。

御息所（西園寺公顕女）は尊良流罪以前に亡くなっており、物語そのものは史実とはいえないが、いくつかの興味深い論点が浮かび上がる。まず小島論文でも指摘されているが、鳴門の渦潮が「龍宮城の東門」に例えられているところである。中世において竜宮は海の底の別世界と考えられていたというが<sup>(9)</sup>、渦潮がその入口とされるのである。嵐の際に海に捧げ物を投げ入れるという行為は『土佐日記』にもみえるが、そのなかでも渦潮が龍神のすむ特別なものとして認識されていたことを示すものといえる。

さらにこのような言説が尼崎から出航した梶取の言葉として語られていることも重要である。この物語は『太平記』のなかでは金崎城落城の後に回顧談として配置されており、自己完結的な構成になっている。それ故にか『太平記』から独立して、一条兼良作とされる室町物語「中書王物語」・幸若舞「新曲」などへと展開していく<sup>(10)</sup>。また尼崎海岸寺には近世写本の「秦武文縁起」があり、武文の墓も存在していた（現存せず）<sup>(11)</sup>。「縁起」は「文明七年八月六日の大波に損亡の書籍とも数多有之中より見出し」たものとされ、この日に尼崎が大波に襲われたことが確かめることから<sup>(12)</sup>、成立はそれ以前に遡る可能性がある。東門というのも大阪湾側からみた認識で、そもそも尼崎に集う梶取たちの渦潮にまつわる伝承こそが原型で、それに尊良親王と御息所という固有名詞が加えられ、『太平記』に取り込まれたものではないか。

『味地草』巻 28 阿那賀浦には、「満汐の時は小豆島をさして込ミゆく汐の中に一筋北乃方鳥圓山を目当てゝ馳る汐」を武文潮と呼称するとある。もともと特徴的な潮流があり、それが『太平記』に仮託して名付けられたものだろうが、渦潮についても実際に航行する梶取たちによるさまざまな伝承があったものと思われる。語り本系『平家物語』の覚一本が大覚寺に伝承されているように、尼崎は梶取だけでなく芸能者の集まる地でもあり、そこで成立したものと考えておきたい。

それはさておき、助かった御息所が沼島でそこから土佐に向かう航路が危険と論されている点も興味深い。貞和 5 年（1349）10 月に日向国細嶋を出航した日叡一行は、阿波国勝浦（小松島市）で海賊に取られ、和泉國小島に連行された者、逃れて椿浦に潜行したものがあつたらしい<sup>(13)</sup>。後述する南北朝内乱の影響も考えられるが、『土佐日記』以来の海賊が跋扈する海域であったことを示している。なお沼島の浄土宗寺院西光寺は、御息所の滞在地となったことで王寺と称されるようになったとされる（『味地草』巻 32 沼島浦）。

## 2. 沼島と梶原氏の展開

### （1）南北朝内乱と沼島

一方、『太平記』で沼島を海士が居留するのみの地とするのは文学的虚構にすぎず、実際には南北朝期に軍事的に枢要の位置を占めていた。そのことを示すのが、近年その全貌が紹介された紀伊南部を拠点とする熊野水軍小山氏に伝わった文書群である<sup>(14)</sup>。

小山氏は鎌倉末期の元亨 4 年（1324）には、鎌倉幕府のもと「阿波国海賊出入所々」を取り締まる地位にあり、「熊野海賊」掃討のために配置されたと考えられている武士団である<sup>(15)</sup>。延元 2 年（1337）9 月 18 日「後醍醐天皇綸旨案」においては、小豆島で挙兵した佐々木信胤に合力するようとの命令が「塩崎一族中・小山一族中」に宛てられている（西向小山家文書 15）。その本文中では「南山衆徒」と表現されており、吉野を拠点とする南朝方の熊野水軍として活動した。

そして年末詳 6 月 3 日付「後村上天皇綸旨」で、敵方が小豆島に襲来しているとの信胤の注進をうけて、「沼島後措」にただちに発向するよう「小山一族中」宛へ命じられている（同 7）。さらに年末詳 7 月 17 日付で大將軍某は、「丹生城後措依<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>延引<sub>一</sub>散落之条、無念之次第也」として、小豆島にも 13 日に襲来しているとして、「今月廿四日為<sub>二</sub>彼後措<sub>一</sub>淡路・小豆島之間、面々可<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>発向<sub>一</sub>給」よう、「小山一族中・塩崎一族中」に命じている（同 8）。

播磨丹生山での足利方と南朝金谷経氏との戦闘は暦応 3 年（1340）7 月まで継続していたとされ<sup>(16)</sup>、それと対応したものである。そのため現実に発向は行われなかった可能性が高いが、紀伊から小豆島に抜ける航路のなかで淡路とりわけ沼島が重要な位置にあると認識されていることを示す文書といえる。

それに対してその航路の利用が確認されるのが、興国 3 年（暦応 5 年・1342）の南朝方脇屋義助の吉野から伊予への渡海である。義助は熊野新宮別当湛誉らの仕立てた 300 余艘の船で、紀伊田辺から「淡路国武島」まで送り届けられた。ここには安間（阿万）・志知・小笠原が南朝方として城を構えており、200 余艘の船で備前小豆島まで送られ、去年より南朝方になったという佐々木陸奥守信胤・梶原三郎が大船をそろえて、義助は「伊予国

今張の浦」へ到着することができたのである<sup>(17)</sup>。

佐々木信胤はすでにみたように延元段階で南朝方であるなど、個別の人名や情勢については『太平記』が脚色している可能性はあるが、航路の存在は備前焼の流通からも確認できる<sup>(18)</sup>。紀伊国日置川河口の長寿寺（白浜町）境内からは、義助の渡航と同年の暦応5年の紀年銘がみえる備前焼が出土しているのである。1977年には小豆島東方6km水ノ子岩から14世紀半ばの備前焼も出土している。和歌山県下での備前焼の出土は紀ノ川河口部よりも、日置川河口の安宅氏城館群のほうが高い組成であることも指摘されており、大阪湾経由ではなく淡路西浦ルートで搬送されたとみられる。そのなかで沼島が重要な中継地になっていたと考えることができよう。

もっともこのルートは南朝のみのものだったわけではない。長寿寺出土の備前焼は紀年銘・絵画が彫られていることなどから特注品と考えられており、注文主は小山氏と同じく幕府によって配置された安宅氏とみなされている。観応元年（1350）6月3日付「足利義詮御判御教書」は「安宅一族中」に宛てられ、そこでは「淡路国沼島以下海賊退治事、早廻<sub>一</sub>籌策<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>致<sub>一</sub>忠節<sub>一</sub>」よう命じられ、南朝勢力の追討が図られている。文和2年（1353）10月には淡路守護細川氏春勢が、上田保円鏡原（南あわじ市神代社家）で南朝勢力をやぶり、そこには阿波小笠原一族・阿万六郎左衛門尉が含まれている<sup>(19)</sup>。小笠原・阿万は『太平記』で沼島の南朝勢力としてみえる存在で、海域世界の制海権も次第に幕府方が優越するようになっていったと思われる。

## （2）梶原氏と海域世界

さて脇屋義助の伊予下向を支えた勢力として、小豆島の梶原三郎なる人物が『太平記』にみえることは先述した。この梶原を名乗る勢力が室町・戦国期の沼島に確認でき、当該期の海域世界を考える手がかりとして取り上げることにする<sup>(20)</sup>。

明德2年（1391）12月の山名氏が敗れた京内野合戦に参陣しなかった紀伊守護山名義理だったが、大内義弘に守護が与えられ討伐の対象になった。明德3年2月に義理らは紀伊国藤代（海南市）から「海賊ノ梶原」とともに遁れ、冷水浦（同）で船一艘を接收して由良湊に停泊し、そこから鎌倉に向かうか、備後に向かうか内談する。しかしそれを聞いた「船人」が一日二日と思っていたと梶原に抗議したため、義理らは由良興国寺で出家することになった<sup>(21)</sup>。

軍記物語「明德記」の記述で、もっとも良本とされる宮内庁書陵部本では鎌倉のみしか語られないが、由良から備後に向かうというのは淡路西浦ルートが想定されていることになる。梶原は「海人」を統括する地位にあり、延元元年（1336）には由良の内陸部にあたる大徳寺領高家荘長力名を濫妨する存在として、「梶原四郎左衛門尉」の名前がみえる<sup>(22)</sup>。室町期の紀伊守護は畠山氏になるが、根来寺と粉河寺の紛争で討死した畠山衆として「梶原海賊・同掃部助」があり<sup>(23)</sup>、その後も「海賊」と扱われていたことがわかる。紀伊国加太荘に「梶原殿屋敷」があったのも、その活動故のことだろう<sup>(24)</sup>。『紀伊国続風土記』には広村梶原氏所蔵文書が収録されているが、16世紀後半の後北条氏の水軍に関わるもののみである<sup>(25)</sup>。詳細は不明だが、関東に進出した一流に伝わったものだろう。

一方、沼島にも梶原氏が存在した痕跡がある。15世紀後半の淡路で活動した武家多数の署判がある奉加帳には、平治郎の花押があり貼紙には「梶原」とある<sup>(26)</sup>。また阿万の亀岡

八幡宮には、「沼島住人梶原越前守平俊景」が永享8年(1436)4月に奉納した経巻があったらしい<sup>(27)</sup>。正徳2年(1712)2月に権大僧都空敬が記したという奥書のある沼島神宮寺に所蔵される「淡州神宮寺縁起」にも<sup>(28)</sup>、永享8年に尊善法師が「大旦那梶原越前守平俊景」とともに社殿を建立したとある。いずれも確実な史料とはいいがたいが、室町期には沼島を根拠とした梶原氏が存在していたと思われる。沼島神宮寺には兵庫県指定文化財となっている鎌倉前期の石像五輪塔があり、梶原景時墓と伝承されているのも、室町期の梶原氏の活動が反映されているのだろう。

『太平記』では沼島に梶原氏は見えず、「淡州神宮寺縁起」でも楠木正成が本田徳郎衛門に与えた建武元年(1334)の文書があると記され(現存せず)、南北朝期後半以降に紀伊から来住した可能性が高い。この紀伊梶原氏の根拠である広と淡路との関係を示唆するのが、由良湊神社に所蔵されている「八幡宮通縁起」である<sup>(29)</sup>。その奥書によると、永享3年に炬口八幡宮の金剛仏子宰相宥恵が「由縁」があつて「紀伊国在田郡東広庄八幡宮」から借用して書写し、文安元年(1444)に由良庄八幡宮に奉納したとある。「由縁」の具体的内容は不明だが、紀伊広と淡路東岸の炬口との間で交流があつたことがわかり、あるいは梶原氏が媒介していたのかもしれない。

さらに阿波の三好之長の被官としても梶原氏が見える。永正3年(1506)2月に執事撫養掃部助を率いて上洛した之長は細川澄元を京兆家家督に立てるが、翌年6月に細川澄之に追われ8月に帰京を果たす。しかし之長の軍勢が狼藉を繰り返したため澄元が阿波に下国したいと言いだし、之長は「被官梶原」を殺害してわびを入れている<sup>(30)</sup>。之長は阿波守護細川尚春とは交戦状態にあつたが、阿波に梶原氏はみえずここに登場するのは沼島梶原氏の可能性が高く、海域世界を通じて阿波側の勢力と提携していたのではないか。なお『味地草』巻30上本庄村には、永享年中に沼島城主梶原越前守俊景が阿万城の細川方を襲撃したとの伝承を伝えている。永享年間に俊景がみえるのは前述したが、むしろ情勢が流動化していたこの時期に引きつけて考えるべきではないか。

この三好之長が永正17年5月に細川高国に敗れると、対立する細川澄元と結んでいた將軍足利義植は翌年3月に京を出奔する。伝聞情報によると堺から洲本に渡ったようで<sup>(31)</sup>、「淡路ニアタ木ト云海賊ヲ頼り御座」し畠山尚順と結んだとされ<sup>(32)</sup>、「淡路国武養」<sup>(33)</sup>・「淡路ノ武嶋」<sup>(34)</sup>にいたともいう。また尚順は紀伊国広城へ「カチウラ」とともに入るが、敗れて淡路に逃れ義植とともにあると5月段階で風聞されている<sup>(35)</sup>。いずれも伝聞情報で、ここでの梶原は紀伊を拠点とするものだろうが、淡路への渡海は沼島の梶原氏との連携によるものかもしれない。義植本人も沼島に滞在していた可能性があり、沼島の伊藤氏庭園は義植滞在時のものともいわれる<sup>(36)</sup>。

また安宅氏は三好長慶弟の冬康を当主として洲本を拠点とし、淡路十人衆と呼ばれる水軍の中核として活動したとされるが<sup>(37)</sup>、それ以前の状況について確実な史料で跡づけることはできない。「安宅一族中」に沼島海賊退治を命じた足利義詮御判御教書には触れたが、それを伝えた紀伊安宅氏の近世の家伝では足利尊氏の命令で一族が淡路の海賊を防ぐために淡路由良に居城したという<sup>(38)</sup>。『味地草』巻4由良浦にも、紀伊安宅氏が所蔵していた文書が書写されており、淡路側にも同族との認識があつたことがわかる。「当国一乱」の時に売られた鐘を安宅秀興が買い戻して千光寺(洲本市)に寄進したという、永正16年の追銘が淡路安宅氏の確実な初見だが<sup>(39)</sup>、梶原氏と同じく南北朝内乱以後に紀伊から淡路に

一族が移住したとみてよいのではないか。なお安宅氏は三好氏と同じく阿波小笠原氏を祖としており、戦国期の淡路における優越性は紀伊との関係より、そこにあるのかもしれない。

推測を重ねたが、結局義植は大永3年(1523)4月に阿波撫養で没する。梶原氏は沼島神宮寺に残る天文2年(1533)12月23日の棟札に「檀那梶原景口」、天正8年(1580)4月11日の棟札に「旦那梶原秀景」が見え<sup>(40)</sup>、戦国末まで活動していたことがわかるが、変転する情勢のなかでどのような立場であったのかはわからない。

なお播磨にも南北朝期から梶原氏がみえ、戦国期には高砂を拠点に水軍としての活動徴証がある<sup>(41)</sup>。鎌倉後期から播磨福井荘(姫路市)地頭は熊野海賊に対処する存在とされており<sup>(42)</sup>、気になるところだが、紀伊・淡路との直接の関係を確認できない。

### 3. 「兵庫北関入船納帳」・「雑船納帳」からみる淡路の湊の特質

断片的な史料と近世地誌などから憶測を重ねてきたため、最後に文安2年(1445)という定点観測になるが、兵庫北関を領有する東大寺にもともと伝来した「入船納帳」・「雑船納帳」という2つの帳簿から<sup>(43)</sup>、淡路の湊の性格に触れておきたい。

「入船納帳」は兵庫北関に入港した商船について、その船籍地・商品の数量・関税額と納入日・船頭名・取り扱った問屋が記されたもの、「雑船納帳」は税額・船籍地・積み荷(人もしくは木)・木の場合は数量・船頭名が記されている。前者の船籍地は摂津尼崎から豊前門司に至る瀬戸内海各地と阿波・土佐東部、後者は摂津・淡路・阿波北部・讃岐引田に限定される。和泉・紀伊が全く見えないのは最終目的地が最大人口を抱える京都の場合、兵庫を経由する必要がないからで、淡路・阿波の場合も尼崎・堺に向かう船を想定しておく必要があるが<sup>(44)</sup>、湊の役割を知る上で貴重な史料といえる。

「入船納帳」に登場する淡路の船籍地の多い順に並べると、由良125艘、商品は阿波塩3艘・三原1艘以外は全て樽。三原64艘、全て塩。室津9艘、三原5艘・樽1艘・大麦1艘・大麦と三原両方を積むもの1艘・米と三原1艘。岩屋4艘、米3艘・三原と米と大麦1艘。洲本2艘、米1艘・米と三原1艘。竹口(炬口)2艘、米1艘・アラメ1艘。阿那賀1艘、三原。与井(比定地未詳)、鳥飼年貢。となり、阿波北部では、土佐泊3艘、米2艘・藍1艘。撫養2艘、藍1艘、小麦1艘がある。

同じく「雑船納帳」では、岩屋50艘、洲本25艘、育波20艘、海士(阿万)17艘、竹口17艘、阿那賀11艘、室津8艘、江井6艘、机3艘、由良1艘。阿波北部では、木津34艘<sup>(45)</sup>、北泊5艘、右や2艘、撫養1艘。積み荷は全て木で、薪として消費された。

前者で135艘みえる由良は、後者では1艘のみで、樽の搬送に特化していたことがわかる。樽は淡路産ではなく、「入船納帳」では阿波南部・土佐の船籍地の商品としてみえ、由良もそれらや紀伊から搬出されたものを輸送していたと思われる。これは沼島を核とした海域世界とも重なるもので、安宅氏が由良を拠点としたことも納得できるものである。

前者で由良に続く三原は、後者では全く見えず、商品も塩に特化している。淡路の他の船籍地の商品としてみえる三原は三原から産出される塩という意味で、兵庫・尼崎船籍の積み荷としてもみえ重要な産物だったことが知られる。『延喜式』にも淡路からの調として塩がみえ、戦国期に淡路から上洛した日蓮宗僧侶が土産としたのも「淡路墨・塩」だ

った<sup>(46)</sup>。三原川河口にラグーンが広がり、そこで塩づくりが行われていたことは近世地誌にもみえるが、鳴門周辺で生産された塩も三原と扱われていた可能性がある。報告書福家論文は由良が商品として扱う阿波塩を鳴門産と理解するが、それは航路から考えても阿波南部から産出されたとみるのが妥当だろう。由良が淡路東浦ルートを通る遠隔地航路の中継点であったように、三原も西浦ルートで枢要な地位を占め、周辺で生産された塩も集積され一括して淡路の特産品として三原と呼称されていたと思われる。

一方、後者トップの50艘の岩屋は前者で4艘のみ。育波・阿万は前者にはみえず、竹口・阿那賀も圧倒的に後者が優越し、阿波でも木津は後者のみ圧倒的な量を誇る。淡路守護細川氏から室町殿へ「淡路木」を貢納することが慣例化していたようで<sup>(47)</sup>、塩と並ぶ淡路の特産品といえるものだった。塩の生産にも燃料用の薪は不可欠だが、この時期には山論が多発するなど慢性的燃料不足状態になっていた畿内にも供給されるようになっていたのである。兵庫に近い岩屋・育波が多いとはいえ、淡路南岸にもみえ阿波木津・讃岐引田など阿讃山脈を背後にもつ湊からの供給も相当なもので、鳴門海峡周辺も鬱蒼とした森林というより低木が広がる景観だったと思われる。

また近在から伐採された薪を搬送した船頭は、帰り荷として多様な商品を仕入れ戻ったことだろう。由良・三原のような遠隔地航路・特定商品に特化した大規模な湊と、小規模な湊が重層的に存在しており、水軍を考える上でも重要な視点といえる。

## むすび

沼島を中心に中世における淡路島南部の海域世界の様相について検討してきた。そこは10世紀から海賊が活動していると認識される空間である一方で、紀伊から沼島・福良を経由して瀬戸内海につながるルートも12世紀末には確認できる。鳴門の渦潮を「龍宮城の東門」とする認識も、そこを航行し尼崎に集った梶取たちの語りから生み出されたものと思われる。

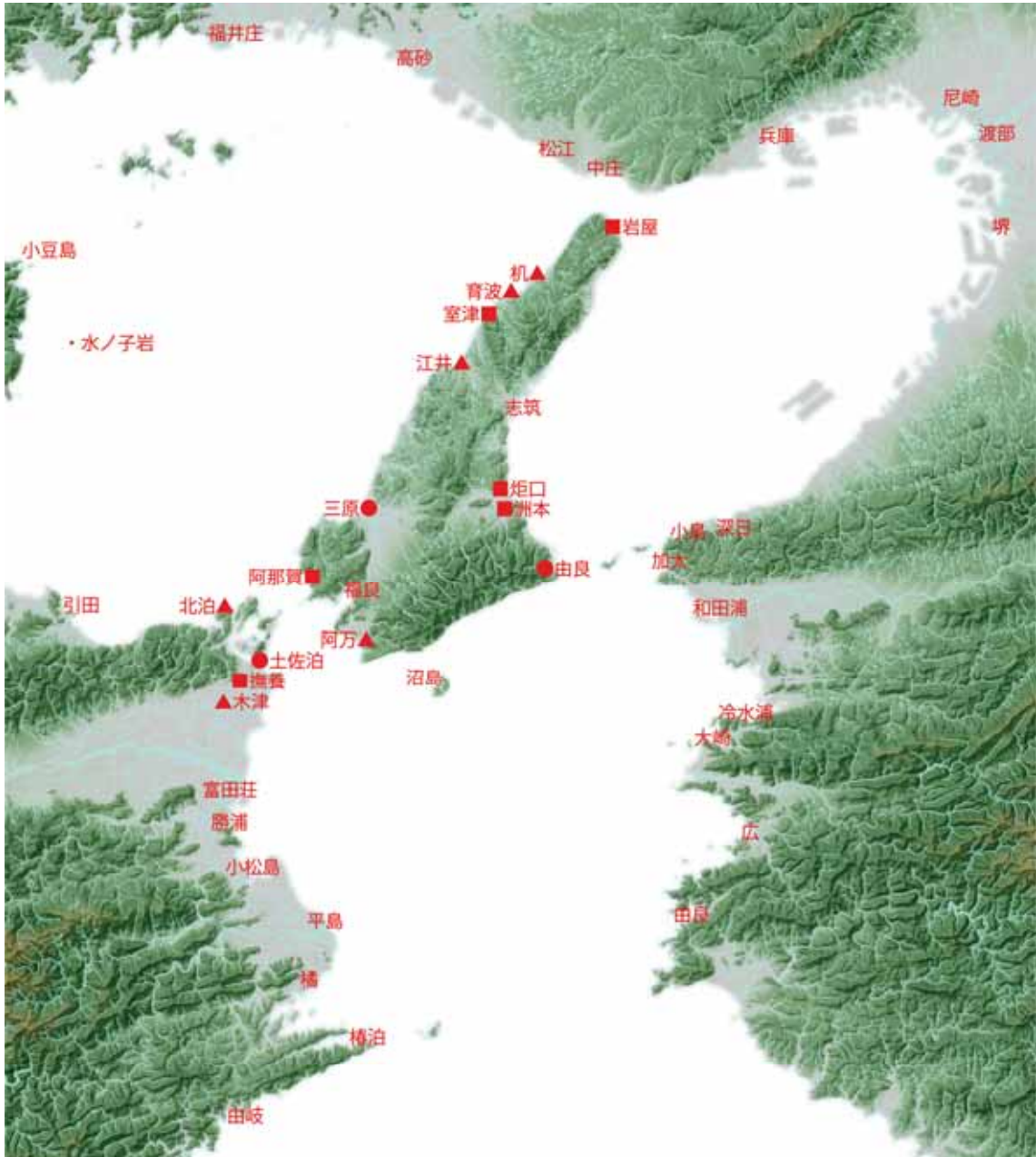
14世紀になると海域世界の姿はより明瞭になり、沼島は軍事的要衝として南朝方・足利方両勢力から注目される場となる。そうしたなかで紀伊から移住したと考えられるのが沼島梶原氏で、同じく紀伊出身の安宅氏のもと戦国期まで水軍勢力として活動する。この安宅氏の拠点とされた由良は、紀伊・阿波南部から淡路東浦ルートの遠隔航路の中継点となる一方で、三原が古代からの淡路の特産品であった塩の集散地として西浦ルートの主要港として機能する。また淡路全域・阿讃山脈は畿内へ向けての薪の供給地となったことで、沿岸の小規模な湊も積み出し港として活発な流通活動が行われていた。このような重層的な構造は水軍編制にも応用されたと思われる。

さて沼島の梶原秀景について、『味地草』では天正年中に三好氏あるいは秀吉により滅亡、あるいは長宗我部氏に敗走し自害、秀吉配下の仙石秀久に降り阿波へ落ち延びたなどともありはっきりしない<sup>(48)</sup>。何れにせよ近世沼島には全く登場しなくなるが、沼島そのものは阿波伊島・紀伊日ノ御碕におよぶ広範な漁業権を保持していた。沼島漁業の詳細は本報告書の磯本論文で述べられるが、その前提にはここで明らかにしてきたような中世海域世界があったといえる。



- (1)福家「原始・古代・中世の鳴門海峡」・小島「古典文学に描かれる『鳴門の渦潮』」（『「鳴門の渦潮」世界遺産登録学術調査報告書～文化編～』「鳴門の渦潮」世界遺産登録学術調査検討委員会、2017年）。
- (2)綿貫友子『紀伊水道およびその周縁部における中世海運・流通の研究』（科研報告書、2006年）。綿貫「紀伊水道内海世界の物流と交流」を含む2018年9月に開催された中世都市研究会徳島大会「紀伊水道内海世界の港津と権力」も、そのような視点にたつ。中世都市研究会編『港津と権力』（山川出版社、2019年）で活字化。
- (3)解釈にあたって、木村茂光編『歴史から読む「土佐日記」』（東京堂出版、2010年）を参照した。
- (4)『扶桑略記』承平4年5月9日条・『日本紀略』同日条。
- (5)『味地草』（影印本5冊は、名著出版、1972～74年）巻29福良浦の烟島には、敦盛伝承とともに福良城主義久（淡路冠者）の祈願所とされたともある。
- (6)『玉葉』寿永3年2月19日条。
- (7)『吾妻鏡』元暦2年2月18日・21日条。
- (8)森茂暁『皇子たちの南北朝』中公新書、1988年。
- (9)関原彩「竜宮城はどこにある？」（鈴木健一編『海の文学史』三弥井書店、2016年）。ただし『太平記』には言及されていない。
- (10)村上学「『一宮御息所事』・『新曲』・『中書王物語』」（『国語と国文学』57-5、1980年）
- (11)尼崎市歴史博物館『花開く江戸絵画』2021年。
- (12)「鎌倉大日記」・「異本塔寺長帳」（『大日本史料』8-8 文明7年8月6日条）。
- (13)「日叡上人縁起」（『宮崎県史』史料編中世1、定善寺文書94）。伊藤幸司「遣明船と南海路」（『国立歴史民俗博物館研究報告』223、2021年）により知ったが、内容の理解はやや異なる。
- (14)神奈川大学日本常民文化研究所編『熊野水軍小山家文書の総合的研究』2021年。紀州小山家文書の概要は同書所収の坂本亮太「総論 熊野水軍小山家文書の総合的研究－熊野の海域史・序論」参照。以下、久木小山家文書・西向小山家文書の引用は同書文書番号に依る。
- (15)元亨4年4月27日「新田経家請文案」（久木小山家文書63）。この点は、高橋修「熊野水軍の活躍」・「戦乱の時代」（『日置川町史』1、2005年）・同「熊野水軍の中世史」（同編『熊野水軍のさと－紀州安宅氏・小山氏の遺産－』清文堂出版、2009年）参照。
- (16)市沢哲「建武・暦応の西摂津・北摂津合戦」（『新兵庫県の歴史』3、2011年）。
- (17)『太平記』24巻1。この点は、山内譲「懐良親王の九州渡海と海上交通路」（『四国中世史研究』16、2021年）でも触れられる。
- (18)紀伊における備前焼については、北野隆亮「考古遺物」（前掲『日置川町史』1）・「『瓦器碗』と『備前焼』からきた水軍のさと」（前掲『熊野水軍のさと』）・「備前焼流通からみた紀伊水道内海世界」（前掲『港津と権力』）・「紀伊半島における中世の備前焼の流通」（前掲『熊野水軍小山家文書の総合的研究』）に依拠している。
- (19)文和2年10月日「船越定春軍忠状写」（『兵庫県史史料編中世9』船越文書1）。
- (20)梶原景時の末裔として、各地の梶原氏を取り上げた研究として、佐藤和夫『中世水軍史の研究－梶原氏とその時代』（錦正社、1993年）があり、沼島梶原氏も取りあげられている。
- (21)「明德記」（『群書類従』20）。諸本については、和田英道『明德記 校本と基礎的研究』（笠間書院、1990年）に依る。
- (22)（延元元年）4月28日「後醍醐天皇綸旨」（『大日本古文書大徳寺文書』60）。

- (23)『大乘院寺社雑事記』長祿4年5月25日条。
- (24)享徳4年2月「賀太本莊年貢等注進状」（『和歌山県史中世史料2』向井家文書47）。
- (25)専論として、上野尚美「後北条水軍梶原氏と紀伊」（『沼津市博物館紀要』26、2002年）がある。
- (26)護国寺文書33（『兵庫県史史料編中世1』）。
- (27)『重修淡路常磐草』8（復刻版は、臨川書店、1998年）。
- (28)兵庫県立歴史博物館所蔵の写真による。
- (29)『兵庫県史史料編中世4』寺社縁起類淡路国2。
- (30)『宣胤卿記』永正4年8月13日条。この間の概要は、天野忠幸『三好一族一戦国最初の「天下人」』（中公新書、2021年）に依る。
- (31)「永正十三年八月日次記」3月9日・15日条（『大日本史料』9-12大永元年3月7日条）。
- (32)「続南行雜録」所収「二条寺主家記抜萃」大永元年3月7日条（前註所収）。
- (33)「異本塔寺長帳」（前註所収）。「武養」は義植が亡くなる阿波撫養とも考えられるが、武嶋（沼島）の誤記の可能性もある。
- (34)「足利季世記」3（前註所収）。
- (35)「春日社司祐維記」永正18年5月11日条（『大日本史料』9-13大永元年5月是月条）。
- (36)『沼島地区民俗資料緊急調査報告書』兵庫県教育委員会、1971年。
- (37)『重修淡路常磐草』2。ただし確実な史料では確認できない。
- (38)「安宅家系譜」（前掲『日置川町史』1）。
- (39)『兵庫県史史料編中世4』金石文一金工品淡路国1。
- (40)『神道大系41紀伊・淡路国』沼島八幡神社資料。現物を調査したようだが、兵庫県立歴史博物館が実施した「淡路島文化財総合調査」の調査カードには含まれていなかった。なお「淡州神宮寺縁起」は宝物の一つとして天文の棟札について「梶原景時公再建」と表記する。また『味地草』32沼島浦には、「城主梶原氏略系図」として、平俊景－景節－秀景という系譜を記し、景節・秀景の官途を播磨守とするが、その根拠は不明。棟札の現物も書写されており、『神道大系』は欠損部分をこれで補っているが、天文の棟札はやはり「梶原景○」とある（『味地草』は欠損部分を○で表記）。
- (41)前掲『日本中世水軍の研究』・野田泰三「国衆梶原氏の動向」（『高砂市史』1、2011年）。
- (42)応長2年3月日「福井莊東保宿院村地頭代澄心陳状」（『鎌倉遺文』24550、神護寺文書）。
- (43)『兵庫県史史料編中世5』東大寺文書一撰津国兵庫関234・235として全文翻刻。淡路に関する先行研究として、武田信一「中世淡路の木船と人船」（『淡路島の古代・中世研究』神戸新聞総合出版センター、2003年）がある。
- (44)この点は、拙稿「中世阿波国の木材産出と流通の展開」（地方史研究協議会編『徳島発展の歴史的基盤－「地力」と地域社会－』（雄山閣、2018年）で「入船納帳」にみえる淡路由良・阿波の港を取りあげる際に論じた。なお淡路では東浦の志筑がみえない点も注意が必要。
- (45)木津を阿波に比定することは、福家清司「中世の鳴門」（『鳴門市板碑総合調査報告書』鳴門市教育委員会、2022年）に依る。
- (46)『実隆公記』永正2年5月14日条。
- (47)『親元日記』寛正6年11月22日条。
- (48)前掲『沼島地区民俗資料緊急調査報告書』。



- ：主に「兵庫北関入船納帳」にみえる淡路・阿波北部の湊
  - ：「兵庫北関入船納帳」・「雑船帳」とともにみえる湊
  - ▲：「兵庫北関雑船帳」のみにみえる湊
  - 記号なし：その他主要な湊（平島・橘は「入船納帳」にあり）
- 原図はひなた GIS 川だけ地形地図